



九月
十月
夜話



3039
7

飯島三省

種相

傳記 半月夜話後編卷之二

江戸 白頭子柳魚 編次

第拾三面 法筵想夫憐

當下歩卒の再び大ひに怒る。その狼籍する還らざると返さず
み措べきや。と隅を捕へて矢庭に推戻さんとする。大磐石
のごとくみりて些も動う。此物音奥へめ聞へく。同風尼の
何れとやと立出ぬ。左右を以て緯の子細を訊問せり。歩
歩卒の斯とるより忙しく大地は平身恐る。緯の趣を
ゆへあへる。同風尼情を召し。その何となく其同人施行
の代り琵琶の一曲を弾せん。今日の転寫する人

半月夜話後編卷之二

乃ち欲せしとて爰に片邑村落より音律をんとを嗜む
 る人あり。これの遺感と思ひし琵琶を弾せんといふ願
 希る幸あり。是に八音克諧て倫を奪ふ事ある時、
 神明仏壇も感應ありはまことなり。米ありとも。錢ありとも。望
 りようせてとらせん。疾これへ来り。妾が傍りて琵琶の秘
 曲を弾むべし。といふと歡げば宣ふは彼盲法師の鼻のあ
 りをおどめりし。嚮の歩卒は對ひ你の大きく言懲らしめ
 ひし。却るに公の傍へ来て琵琶をひけよと宣へり。これ
 みるも尚飯をべさやと詰られて歩卒の涙を搔ふ。争返
 じとしべこなり。是は你の果報微妙あり。に彼美しき

尼公の傍りて琵琶を弾といふ其加にあやうし趣合なり
 然にいへ美しき内容色を一目拜せせてやりとたりのある
 と。吟さつと疎々と門前の方へ走り去りぬ。頓く同風尼の侍
 女は引路さしつ彼盲人を奥より客廳に召せぬ。ひく
 萬般管待あり。程は彼盲人の竟る味ひることある。珍膳
 美味は一つくみ舌鼓を鳴らし。飽迄吞食しつ。や十分の醉
 を発しつとつて顔を猿の如くふりて漸く箸を下ふ
 か。さして指めて楊枝より歯を弄ふをみて女は笑ひ
 かくして退さぬ。斯く同風尼の彼盲人を近く召寄りの疾
 琵琶の一曲を弾いてゆめせよと宣ふは法師の心ほ

て奇負ひ来り袂包をひらき裏より一面の琵琶を拿出
く想夫憐より曲を弾くは是は其音絶妙なりて大
弦の嘈々として急雨の如く小絃の切々として私語のごとく
尼公をさぐり管弦よりさ侍女們迄弦を低け耳を清く
心恍惚としてゆいりて暫らくして弾く終り撓を下し
さしをけり同風尾ハ殆ど感激すく左右をへりて實
は人の侮るすべしとのるれ此瞽者言語風俗都て木訥
きといへども其琵琶は妙手あるなり尋常の人の及ぶ所
はあらば定りて蘊奥を極め人とはあきい年来学びたる
ゆゑてあらんむらん亡人々も然るを歡びのやれ而今

你が弾く曲は何と呼ぶと同くをさるる盲入るへくハ
今弾くを想夫憐の曲とまづけて女の夫を想ひて作れ
る曲よてさるる。此外流泉啄木揚真操上玄石象など
唐土廉丞武仙人より傳ふる所の秘曲ありて日の本ありて知る
もの稀なり吾儕故有るて悉く学び得てをべるべしと白
そ尼公にいふは氣色うるうく侍女は敢知とら。不四を
あげぬひつ。再び左右は對つせぬひ你等の何と思ふぞ此
盲人の面体といひ声音までんハバつるふとよく似たるふ
あらどやと宣へば左右門も口を揃へて妾們も嚮より
思ひ侍せりと應ふるを盲人のやとがれ。その何と宣ふ吾



蟬丸偽育
 人とうりて
 同風尼の
 前や琵琶
 とさんど



面体より声音迄似しとい。抑誰人より似しとやといへむ。
 尼公ハお微笑みひる答へに再び左右あは問へと何れも笑
 めのこゝろて答る者なり。問事数回よりて同風尼ハ漸く宣
 ふふ今妾が似しと言ひい。何をがうまん三歳以て世を
 去りぬひし吾夫春風公の面影よりくも似するや然れいへり。
 實は目こそつゝ之は鼻筋といひ口元より物りゝ形勢まで吾
 夫と瓜をニツは裂ぎて其終之妾夫の世を去りぬひてよ
 り後より佛の道に入り三歳の月日を過しえれど今更な
 別れし夫は面影の似しと思へば何とやらん意とこそめた
 て思ひに色は顕るれい。侍女們迄も笑みぬれと言

て衣の袖をお覆ひ恥づける面色は盲人のお笑ひ
 世を去りぬひし君は吾侪が姿の似しとい。誠は諺にい
 他人の猿似とやらんゝ類るるべき歟或博識はゆること
 あり昔中華の孔子とやらんゝ人ハ祭に聖人としておと
 せしと陽虎といふ愚人は似しをりて捕らへられぬひ
 し更ありし。夫と是とい大く異なるれど吾侪が如き才
 も徳もるた賤者の然る貴人より似しらん。吉祥は
 此処木辺は長居せが奈何る答はやあつらん最早は暇
 ぬつてんと立んとせんが尼公ハ慌忙と裾をとらへ心
 あうげ。

あさり山崎さへつる山崎の

と古き歌の上の句を日吟と此歌の下の方知れりやと

宣ふは盲人眉を頻る。その人のある所の歌みして憶ふ

浅くも人知れぬもの

爰の名はあま安積山の辺りなるふ。その古歌をのりて情を

示しめしめぬ。吾儕が弾や想夫憐の曲より三歳

以来。ちやうどひ。負心も乱れぬ。浅くも吾儕が

思ひ初めぬ。浅猿やと呆れ。て暫時辞もる。うけり

當時同風凡へ上は着ぬ。ひる袈裟法衣をうる。ぐりて

持する珠数をすく。は引裂て遙る。げ忌の袈裟

法衣や疎すの仏三昧や。妾三年以来貞操をもちり。

阿武隈川の辺り。は行ひ。せ。埋。木。の尼法師と

さ。お。夫。の菩提を。折。今。今日。你。が。琵琶

の音色。といひ。且。面。体。の。夫。は。似。る。我。る。も。我

は。あ。ら。で。陸奥の忍文字。摺。誰。ゆ。へ。乱。初。煩

惱。心。情。お。ゆ。ひ。ぐ。ら。と。孝。謙。帝。の。引。削。の。道。鏡。を。寵

愛。の。あ。ま。り。渠。は。帝。位。を。さ。え。ゆ。つ。な。と。い。ひ。と

の。最。も。尊。さ。十。善。の。け。身。の。上。は。も。捨。た。惑。ひ。の。道

る。も。抑。誰。も。と。けて。入。り。ぬ。らん。実。は。さ。と。さ。も。賤

さ。も。意。は。差別。の。る。と。もの。を。不。便。と。思。ひ。て。妻。が。致。し。何

卒とどらるへて給たまふれと人目ひとめも恥はづれと口説くどきのみよぞ言こと
人ひとの殆ほとんどをいそあす。既すでにをうとて僕うつく々と困こづむとてさる形かたち
勢いきなりは左右等さうどうどうのそれと悟さとり送おくは袖曳そでひき低言ひそか言合あはて特室とくしつ
は聞きこをまつひ再び其処そこへ出来いたり尼公にこうは對むかひて云いふ。
りや清記せいぎ様さまの稚君ちこうは誘おんひのひくは歸館きくわんあ
りとうるの憚おそりゆふ及および最前さいぜんより顔色かんとくの平素へいそは変う
りてうへにせもののはお病やまの癪あせりや起おこるつとあはさま幸さいひ彼
処そこの一室いつしつは床とこもあてておれが暫しばし中なかつとて返かへらせりやも違ちが
はあらじとれるる盲人めくらんも則すなはち傍わがはへ誘おんひては好このの琵琶ひばの秘ひ
曲きょく今いま一曲いつきょくあらつとゆふ召よめなり。は心こころも清きよしくあらうといふ

ん倡疾いざなくと一向いこうは尼公にこうと盲人めくらんを一室いつしつの裏うらへ推遣おしやりて屏風びやうぶを
蹴ふ乱らん離りと引廻ひきまわし。侍女しじよ等らも打うてさる。いで是これはうらな昔むかし候ころ等らも
想夫おもふの評林たうりん送おくはゆふのゆせりて責せての憂うれをさるうらん。
いざぬへて共侶きりょは次の間まへてを退のりたり始終しじうの動靜どうせいは
物蔭ものかげは窺うかがひ見みる永觀えいくわん功底こうてい圓まるき頭かぶは腕うでの袖そでをうけて飛とで
出で憎にくき盲目めくらん法師ほうしなる奈何いかん故敗こたいは似にこればとて彼笑かのわらうらん
尼公にこうを此場このばで抱かかて涅槃ねはんなる這奴このやつが為ために今日けふの日ひは佛ぶつ滅めつ
るぬ大安たいあん日ひ。極樂ごくらく往生おうじやうするやうも遙とほくおさうて有あり難がたらん
縦たてや領主りやうしゆの後室こうしつでもさうも尊とんき此精舎このしやうがを盆屋ぼんやにさるるは穢けがれ
る。恙いさどうおしてこれんばと屏風びやうぶの裏うらへ入いるよと見みへるが奈何いかんハ

しくん兩個とも三々余りなげ出され。これいと驚く。後の
 方。屏風を磔と蹴返せし音とて。人へいさめ多くて。而も
 活とて。ひらきて。頭巾を後へる。なぐ。捨。傍。は。さ。つ。つ。つ。
 琵琶。を。拿。て。直。躬。と。ま。ば。同。風。尼。は。声。さ。く。誰。も。る。
 妾。が。関。は。曲。者。あ。れ。疾。縛。う。と。言。の。下。侍。女。們。の。阿。と
 答。へ。く。各。々。禪。願。卷。最。精。悍。く。お。扮。て。長。刀。小。腰。は。
 け。い。こ。と。て。舞。々。と。そ。取。卷。う。る。當。時。同。風。尼。の。懷。叙。を
 抜。鼓。く。辺。り。近。く。つ。め。よ。せ。そ。い。や。う。怪。者。と。つ。ん。く。る。由。
 へ。色。を。以。て。試。見。る。は。実。の。盲。目。は。あ。つ。な。ら。ん。正。
 く。曲。者。は。極。り。疾。本。名。を。名。告。り。し。縛。う。け。よ。と。

曲。者。の。曲。者。の。嘲。笑。ひ。音。を。縛。捕。ん。る。ん。と。虎。
 の。鬚。を。る。で。ん。と。さ。る。は。れ。奇。一。い。で。や。本。夏。の。程。如。
 くん。と。べ。く。そ。と。い。ふ。う。早。く。忽。廣。庭。へ。飛。ぶ。な。る。琵琶。
 を。包。こ。う。袱。を。楚。と。脊。負。ひ。先。は。さ。さ。さ。さ。一。人。の。女。
 を。蹴。倒。し。長。刀。を。奪。取。く。水。車。の。如。く。廻。り。門。外。
 へ。踊。り。出。れ。が。驚。破。逃。さ。る。と。豫。て。より。俟。儲。る。諫。山。
 清。記。夥。兵。を。下。知。して。追。取。卷。が。蟬。九。猛。虎。の。荒。さ。
 る。如。く。當。る。幸。の。欣。伏。せ。難。伏。せ。縦。横。無。盡。な。う。け。
 ら。れ。が。流。石。の。大。勢。砍。立。ら。れ。色。お。く。と。ろ。ろ。を。勇。気。
 ら。ひ。血。路。を。ひ。ら。き。て。飛。が。ど。く。数。十。町。逃。の。び。て。一。息。



せき丸



蛭丸
神馬
まごがら
虎口を
のぐる

山神

物とつく折くら。向ふ森のうちは馬の嘶く声とる。そ
扱ハヌや敵先へまづく。と打駭きて倍とるれば
この奈何一人の老翁。白き馬をひき端然とて歩
と来。蟬丸に向ひ豪傑をえ見忘れぬ。いふと
借見ぬ。是則別人。あはれ岩手山の山神。あつた
大さな歡び其子姉を問ふ。とる。とる。捕人乃
者。追々馳来り捕へんと聞。く。蟬丸の忙し
彼白馬を引よせ。閃と乗ぬ。老翁の馬の響をとる
よとつ。いふ。不思。或。此馬走る。疾。疾。疾。
音。蟬丸が姿ハ。え。む。る。り。ぬ。捕人の者。も。此。休。

只あれくといふ。め。と。つ。て。更。み。其。く。ひ。る。り。の。諫
山清記も詮方る。く。人数を引連立。歸。り。元の。脚。寺。に
到。り。尼。云。へ。斯。と。言。上。り。く。わ。が。同。風。尼。嘆。息。し。ぬ。近
さ。こ。ろ。東。國。の。一。人。の。曲。者。俳。廻。し。て。諸。家。を。悩。ま。す。木
曾。の。残。り。て。兩。使。を。伐。て。黄。金。を。奪。ひ。偽。勅。使。と。る
り。て。保。則。郷。を。害。し。悉。く。其。外。種。々。の。悪。行。を。な。す。は。こ
不。ど。都。の。り。姿。繪。を。以。て。嚴。し。く。尋。ね。ぬ。い。ふ。と。り。て。渠
又。色。々。と。姿。を。な。す。或。時。に。食。と。る。或。時。に。盲。法
師。と。る。其。者。平。生。に。一。ツ。の。琵琶。を。背。負。歩。行。と。す。ぬ
然。ハ。今。日。の。施。行。の。庭。へ。も。入。来。ら。ん。と。思。ふ。が。故。に。は。は。

もあけり合せ待設けらる甲斐のありて見ゆと来りし彼
 盲人。一面の琵琶を背負ひ、偕こそと思ひつれば、色を
 以て偽引よせ討取て都へ訴へ吾子の手柄はせんとの
 と思ひし所は渠逸早くも遁れ去て捉逃しつる残念
 さよと齒をくもて宣ひければ諫山是をゆて命即ち
 の侍へども彼曲者今日こそ捉逃しつれ最早も面体
 を見覚ええりしが再度尋ねりて討取ん事安かへし
 早今日も日西山は傾き侍へば宜しく御歸被るべ
 と進み奉り夫より同風尼の玄閑より出玉ひは
 轎は召せつ。清記を初め其外の人々守護するては故

へこそい歸られり。

第拾四回

庸醫不問談

蟬丸の夢現の如く。須臾の間は幾千道を走ると思ひ
 が忽ち松栢をくぐる山中の祠の前は至るは此時日
 既にこれより何処ともうらちなく。頭を廻らして四
 下を見れば其光景岩手山の山神廟と思へり。これ
 以前はことごとく其莊嚴なることいふをうらうら
 當下彼老翁の蟬丸が辺は額づいて英雄衆を那思
 りやと思ひのり。是岩手山の吾禿倉よりて浅香山を
 去る事寂達るうといへども昔縮地の体よりて你在



爰は倡へり。日外你的計畧の如く。彼残く置なへる百
 兩の黄金もて。祠へ更へ土馬をも斯新は造りて
 今日の危急も救われ。是偏はあなたが賜ふと最
 歡へける。面色ろろ。蟬丸は是をばて且駭と。
 且憾ふ吾老翁の戒をうと。同風尼が艶色はるづ
 と。故は斯危は及べり。宴は慎でも尚慎むべし。色
 慾の惑ひる。と慙愧後悔頻りる。これへ先翁再び
 云や。你必しも此五歳が程に都近くへ行ぬ。猶興
 羽の間を偏曆し。なへ然いへ。藤原小野の両家より
 你的骨相圖をゆて。津々浦々至るまで。咎をふらう

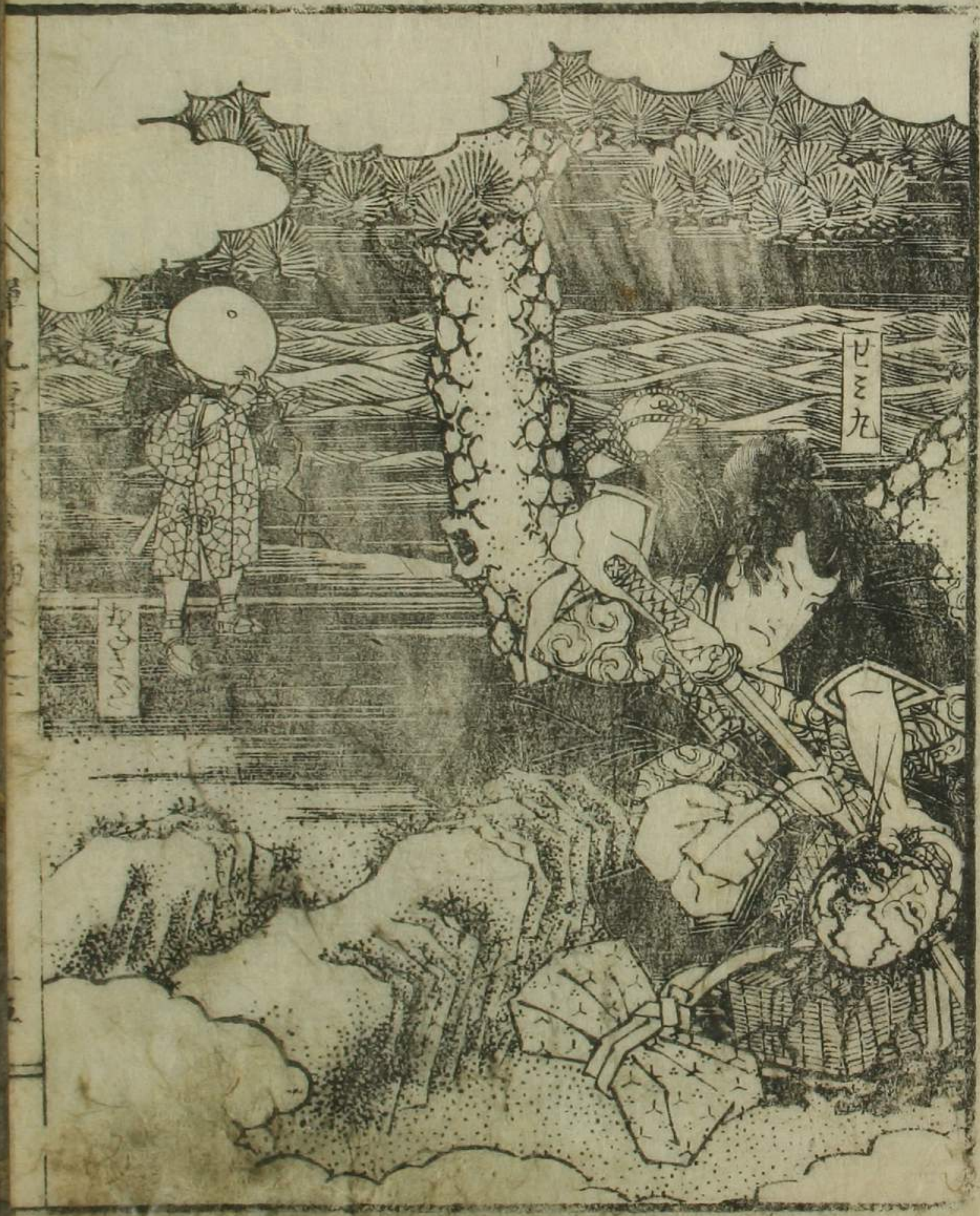
詮爰く。とんむ。うく。を慎む。なへ。は。竟は。探し
 り。これ。め。ふ。べ。く。縦鼎をあらるの勢カ。何うとも今
 日の如く。多勢はて取圍まれるが。寡は。敵せは。と
 争り。遁れ。め。ふ。べ。さ。努。怠りて。おくれ。を。と。う。め。ふ。る。と。懇
 は。教訓。し。つ。馬を曳て去る。と。つ。ん。く。が。姿。の。ん。ん。は
 ろ。う。ぬ。蟬丸は。稍意安堵。て。山神廟の床の上。は。な。て
 暫睡。し。が。と。や。東の方。も。あら。と。渡。る。み。駭。と。目。覚。う。
 祠。を。立。出。雄手のう。こ。知。る。み。太。歳。と。う。り。て。最。清
 らる。堂の内。み。土。ゆ。て。他。り。し。白馬。あ。う。近。う。近。う。
 として。情。い。な。が。む。る。ふ。其。馬。の。足。み。泥。つ。と。て。又。う。う。う。が。

扱さくのさの日ひ我われ乗のりくくくく此この土ど馬ばののてああくくく思おもふふ不いふ審しん緯ゐ限ぎんりるく夫そのより又また怒おこ々々と支し度ど調てうへ笠かさをか泳およくるく琵琶びばをせ脊せ負おひ山やまを下くだり行い々々津つ輕かろるり十二じふに瀉しゃといふ処ところより小こ泊はくへ渡わたらんと便べん舩ふねをを乞こひるる折おりしも順おん風ふうめて海かい上じやうの雷らい疊たふ知し敷し並ならべくく如ごとく乗のり合あひ人ひと々々各おの競あそく話わくめてゆゆをを歩あひ日ひをを歩あひの故ゆゑ里さとの更さらのの寂じやく誇こ白はくは語ごり出いるる一人ひとり年としの齡とし四よ十じふ計けいと思おもひく四し方はう髪かみの男おとこ黒くろき小こ袖そでの申まを刺さるるるる着きて耳みみ觸ふのごとと七しち首くびを夾くわくく野の夫ふ医い師しよあらんとん物ものの言いひさ高かう慢まんく人ひとをさうて足あし下したと

いいいい已いが更さらを愚ぐ老らうととるへ動うごきりり陳ちん文ぶん漢かん語ごをを出いてて虚こ假けををおどおど僻へき文ぶん人じん船せん中ちゆうの人ひと々々對たいひ愚ぐ老らうの原げん崎さき陽やうの産さんよりより曳ひき田でん兼けん脉まくといふ医い師しるる吾われが医い術じゆつの唐たう土ど人じんの直ちやく傳でんりて奈いか何なんる六りく借け病びやうるりも我われ手てよりより者もの恐おそるく治ちせせばといふととる故ゆゑ語ごるも医いの意い之これといひて強かち学がく問もんののよりよりものより項かう日にち云いふの所ところめて應おほ声せい虫ちゆうといふ病びやうをを愁しゆうる者ものあり此この病びやうの其その病人びやうじんの云いふ更さらを何なんはれ腹はらの中うち中ちゆうありて同どうじく云いふ之これ萬まん般ぱん医い藥やくををそせども更さらは其その甲かう斐はいる愚ぐ者もの其その処ところは迎むかへられ思おもへる是これ之これを針はり灸しう藥やく餌じの及およ処ところはあしと頓とんく本ほん草そう綱かう目めなとて其その病びやう客きやくををて一いち藥やく名なをを読よみ

る。腹中の虫も又同じく其名を唱ふ。然るは藍と
雷丸に至りて病客数々讀し腹の中は云々更なる
此はあゝて愚老此虫藍と雷丸を嫌へるなり。と彼
二味を服さうりるふ忽ち治し。と。医の意。といふ
は是木の工夫。と人不知り。古き更を己が功の如
く寂嗚呼。かゝく語る。乗合の人々の化り更る。と
を知らぬ。耳新しく覺ゆ。さうりて殆ど感。と。く
動散。やう。蟬丸の傍痛。さ。更限り。と。所謂遼東
の豕。と。斯る更をや。いへ。と。心中は可笑く。そ
らぬ。う。て。や。い。ふ。が。又。一。人。の。裏。中。人。彼。医。師。は

對の昔。郷。ま。て。る。が。年。末。二。十。四。五。な。れ。ど。髪。髮。悲。く
白。こ。者。あり。是。等。の。こ。と。も。倘。や。藥。ま。て。黒。く。る。る
べ。さ。や。と。問。ふ。は。氣。脉。答。へ。く。夫。毛。髮。ハ。血。の。余。り。に
て。血。氣。枯。る。の。の。白。髮。と。る。と。い。へ。と。も。遇。は。生。れ
付。て。白。髮。の。者。あり。是。ハ。治。し。難。く。彼。店。土。の。老。賄。と
い。ふ。人。の。母。の。胎。内。に。有。る。事。八。十。一。年。あ。り。て。生。れ。ぬ。ハ
一。が。毛。髮。悉。く。白。く。故。に。呼。び。て。老。子。と。い。ふ。と。又。日。の。本
の。清。寧。天。皇。も。生。れ。る。が。ら。白。髮。る。り。の。の。御。詳。驗
白。髮。武。廣。國。押。稚。日。本。根。子。天。皇。と。申。せ。と。や。り。
然。る。類。る。ら。ん。り。吾。家。は。秘。る。所。の。妙。藥。は。黒。く。さ。髪



世三九 蟬丸 黒夜見脈 刺殺

と俄頃みづろは白くもる薬あり。又夫と元の如く黒くもる薬あり。是宴これは天下一方こんりいつぽうめて世は稀まれる名方なりと言いつ。懐ふところより細こく許ゆるる紙し小包こづと一物ものと出いく。則すなはち其その白毛散はくもうさんと号なづけ。黒髪くろかみを髪かみして白髪はくかみなるに薬あり。又こるこい黒毛散くろもうさんと呼よび。その白くもるを黒くもる解薬かいやくあり。然しかはいへ是これは合あして服ふくすべき一薬あり。是至これて得えべき品あり。とよて船中せんちゆうの人々耳みみを教して得難えづがたき一薬いちやくと云いふ。奈何いかんる薬やくは待まちるや。序ついでは語りぬへといふ。兼脉けんみく愈よ固こは乗のく。其得えべき薬やくといふ。人間にんかんの心の臓ぞうの鮮血せんけつあり。それ得えて此薬このやくは合あせて服ふくする時ときは若ごとく人々ひとも忽たちに見

賽やまふをうろの老翁らうもうとる。是唐土孫真人たうどそんじんの傳方でんぽうあり。吾家わがの秘ひたる奇薬きやくと語り終はりて又懐ふところはこれね。蟬丸せみまるの始終しじゆうを打聞うちきこて竊ひそかに歡よろこび吾今骨相圖こつさうずをめて尋ねらる身みの彼薬かのやくを服ふく。姑またらく白髪はくかみとるが誰有たれありて我われを認しる者ものありや。と肚裏はらうちは思案しあん。一船いふねの着つを俟まちふとふ。其日の黄昏このくれ近ちかさふ船ふねの小泊ことまりは着つく。乗合のりあひの入いり。送おくる別れを告つげぐ已おのが隨意よみ本もとより蟬丸せみまるの兼脉けんみくが蹤あとは従したがひ行いく。や日ひも暮くれる物凄ものごどと濱辺はまべ傳つたへ。月つきを灯あかりみ。は。割きる所ところと後のちより物ものを言いふ。白刃はくにと枝える腸くもたを一刀ひと斬きる。あ。苦あと叫さけび。仆ふれ伏ふす。賊ぞくあり。賊ぞくありと呼よぶ。れども松吹風まつふきふう

より外は答る者もなほ荒磯の兼脈のよろかひな
が逃んとするを猿臂を延べて襟髪をとつて曳よせ太
股より大地へうけて白刃を貫き懐は手とさう入れて最
前目覚への二箇の紙包を引出して懐中へ兼脈は對
ひていひやう。寔は口の禍の門。舌の禍の根なり。汝よりなほ不
問語せしよりて。竟に己が命を失ふに至る。是自招く所
の禍ありて。人を恨むべきはあらば。吾大望成就するは至
らば。汝が菩提を厚く弔ひて得さるべければ。今我を
與へよ。と言つ。氷の刃と鳩尾は貫き鮮血滾々と流れ
出て見るも鬱悒形勢るる。蟬丸の其疵口は手とさう

入る。心の臓を廻し出し。腰間を提ぐる瓢の中は其血汐
を絞る。こゝ足をあげて死骸を海に蹴り。雉子も鳴る
撃れよ。由るに殺生をくじと。咄く泣き手をさる。刀
を拭く。刀室はおさめ。悠然として去らんと。當時空
結陰。朦朧として村雲打覆ひて。物の黒白もさうらぬ
は並松の木蔭より。一人の旅客頭を出て。雄手は蟬
丸が刀の鏢と睨と捕へ雌手と懐みさう入て何やら
帛紗を包むる物を引出ると。蟬丸の遠てやうと手
とさう。又振らひて取らんと。浩野へ向ふ。又
一人の旅の漂虚とあやと来り。以前の旅客は行當れ

ば。こゝろへは是と蟬丸と心得袖とくらへて引留る。後の
 旅客駭きて頻く振放さんと挑とあらう。蟬丸は
 二足三足逃を行くが竟に彼帛紗包を取返さんと
 暇る。其怪りて跡を問う。那里とある。本々彼兩
 個の旅客等。斯とも知らず。迷ふ争ひ居り。少選して
 急雲月を吐て四下を照らけ。兩人は始て魚見合せ。以
 前の旅客後の旅客を熟視て。你ハ良客の宗貞。うら
 ぬ。との。後の旅客も響の旅客の面を左視右視て。然宣
 どの。博雅。ぬ。の。あらう。この。奈何と。う。う。て。暫し
 送は駭さ。が。博雅の松が根。あ。う。う。け。宗貞

ぬむ。ひ。思ひ出さ。も。六年以前。你も昔も共侶。敦實
 親皇の討手を蒙り。仁和寺に對ひ勝軍の功あり。る
 くら。斯勅勘の身とる。て。諸國を偏歴する。何卒一
 箇の功を。て。元の身の上。立返ら。と思へ。是ぞと思
 ふ。事。も。る。し。が。今宵。圖ら。宿を。覓。う。び。此。演。ま
 来。う。し。何。やら。人の泣叫。が。聲。さ。る。不審。竊。は。並
 木の。小蔭。は。いて。窺ひ。見。る。人。を。残害。して。懐中の。物
 を。奪ひ。鳩尾。を。裂て。血。を。取る。容子。何。あ。も。せ。怪。し。た
 曲者。引捕ら。へん。として。渠が。懐中。せる。帛紗包。を。引出し。
 不意。我手。は。残。る。是。見。ゆ。と。言。う。けて。帛紗包。は。打

関^{ひら}て見^みる。奈何^{いかん}一箇^{いっかん}の靈天^{れいてん}蓋^{おほ}りて猶^{なほ}一枚^{いっまい}の書^{しよ}
あり。熊子^{くまこ}荒夜^{あらかや}及^{およ}び白骨^{はくこつ}とある。博雅^{はくや}の肩^{かた}
懸^かり此^こ熊子^{くまこ}荒夜^{あらかや}双^{ふた}といへる者^{もの}の先年^{せんねん}奥羽^{おくう}又^{また}起^{おこ}り木曾^{きそ}
の山中^{さんちゆう}まで亡^なび失^うせし夷賊^{いさく}る。今の曲者^{まがもの}も慥^{たしか}にそれ
残黨^{ざんたう}とおふへし。叔^{しよ}も捕^{とら}へざりし事^{こと}の口惜^{くちやく}し。と齒^は
かきとる。宗貞^{むねさだ}も始終^{しじう}を省^{しやう}て我^{われ}も又^{また}太^ふる歳^{とし}美濃^{みの}
と近江^{おうみ}の國^{くに}堺^{さかい}麻物^{まもの}治村^{ぢむら}の辺^へりまで怪^{あや}し。曲者^{まがもの}はいで
會^{あひ}て引捕^{いぎとら}んとせし。如^{ごと}汰夜^{たや}の事^{こと}ありて。竟^{つい}に取逃^{とくはな}しと
まど其時^{そのとき}這奴^{あやうき}が銃^{てう}釵^しよりとる。釵^し爰^{こゝ}にありと取出^とりて
見^みると博雅^{はくや}のこれと視^みる。宗貞^{むねさだ}は對^{むか}ひ此^こ程^{ほど}街^{まち}の風説^{ふうせつ}

を伴^{とも}は太歳^{たいさい}出羽^{でわ}の國^{くに}なる。藤原^{ふじわら}保則^{ほのり}郷^{きやう}の館^{くわん}へ太上^{たうじやう}皇^{かう}
の勅使^{ちやくし}橘^{たち}の良利^{りやうり}と偽^{いつて}り黄金^{こうごん}若干^{いくさく}と奪^{うば}ひとり。又^{また}令^{しやう}
年^{とし}陸奥^{りくお}より小野^{おの}春風^{はるふう}が後室^{こうしつ}が汰^た建^{けん}の折^{をり}より贗^{えい}盲^{めう}
人^{ひと}とありて入^いり。曲者^{まがもの}ありと。純^{じゆん}ら骨相^{こつさう}圖^ずをひく
尋^{たづ}ねれども何^{なん}者^{もの}なる事^{こと}を知らず。とゆへ。你^{おん}が麻物^{まもの}語^ご
村^{むら}まで出^い會^{あひ}し。も今^{いま}人を殺^{ころ}して逃^{にげ}去^さり。者^{もの}も疑^ぎら
く。同一^{どうい}人^{ひと}ありて荒夜^{あらかや}及^{およ}び残黨^{ざんたう}ありて或^{ある}は良利^{りやうり}と偽^{いつて}
り。或^{ある}は贗^{えい}盲^{めう}人^{ひと}は打^う拾^{しよ}り。のる。とゆへ。宗貞^{むねさだ}は再^{また}か
博雅^{はくや}は對^{むか}ひ吾^{われ}其^{その}砌^{せき}慥^{たしか}にゆゑることあり。と云^い箇^い様^{やう}。これ
事^{こと}ありと耳^{みみ}は口^{くち}とよせて低^{ささ}言^や。ん。博雅^{はくや}も打^う領^{りやう}と。

藥相長

半月夜話後篇卷之二

爾るる。後必と思ひ合ふ事あるん。夫迄ハ
兩個とも猶諸国とわづて。其實否と糾をべ。と解
とつかへ。又東西は立別れぬ。這時宗貞博雅は何等
の事と私語するや。未爰の說明ごと。此典第廿
回の團圓と讀に至らば。かのむら氷解とべ。

京

